

# 決別すべき昭和・平成モデル、目指す令和・共助資本主義モデルの例

	昭和 / 平成モデル	令和・共助資本主義モデル
社会保障	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口増加、高成長を前提</li> <li>・現役世代が高齢世代を支える賦課方式</li> <li>・高齢世代中心の給付</li> <li>・単一の働き方や世帯のモデルを想定した制度設計</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口減少、少子高齢化、成熟経済下での持続可能な制度</li> <li>・金融所得・資産を含む負担能力に応じた、全ての世代で支えるしくみ</li> <li>・少子化対策・子育て支援（財源は医療・介護分野の歳出改革の徹底により確保）</li> <li>・多様な働き方や世帯構成に対応した制度設計</li> </ul>
雇用・労働	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生産年齢人口（15～64歳）、豊富な若年労働力</li> <li>・新卒一括採用、職能給・年功序列賃金、終身雇用、定年制</li> <li>・企業内特殊技能・知識に関するOJT中心</li> <li>・賃上げ：春闘における賃金交渉</li> <li>・画一的な勤務形態</li> <li>・片働き世帯が大半（有業の夫と専業主婦の妻）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生産年齢人口と生涯現役（75歳までの勤労）を希望する65歳以上人口による労働力の確保</li> <li>・キャリア採用の拡大、職務給導入、雇用の流動化</li> <li>・キャリアデザイン、リスクリングの強化</li> <li>・構造的賃上げ：消費者物価指数に応じた賃上げ水準の調整、最低賃金を全国平均2,000円に早期引き上げ</li> <li>・多様で柔軟な働き方</li> <li>・共働き・共育て世帯の増加</li> </ul>
マクロ経済政策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成におけるデフレとの闘い（大規模金融緩和、需給ギャップを埋める大規模予算、成長戦略）を通じた官製経済</li> <li>・成長戦略の実行は不十分：既得権益の保護による岩盤規制の温存</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インフレ・マインドへの切り替え</li> <li>・民主導経済</li> <li>・人手不足を乗り越える生産性向上</li> <li>・実質賃金の向上、可処分所得の増加</li> <li>・迅速かつ大胆な規制改革</li> <li>・金利のある経済に向けたモデレートな金融政策の転換</li> <li>・財政：EBPM、乗数効果を踏まえたワイズスペンディング</li> </ul>
企業経営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和・高度経済成長期の「日本的経営」</li> <li>・平成・デフレ下のリスクをとらない経営、コスト削減による利益の確保</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術革新による非連続な環境変化の中での新たな価値創造</li> <li>・「共助」の取組みを通じて社会の信認を得ることによる企業のレジリエンス強化、長期的な企業価値向上</li> <li>・イノベーションの促進に向けたDEIの推進</li> </ul>